

尊敬表現「お・ご～になられる」の使用について

— 『国会会議録検索システム』を研究資料として—

李 譚 珍*

(e-mail : gemma001224@gmail.com)

<目 次>

- | | |
|--------------------------|---------------------------------------|
| 1. はじめに | 4. 調査結果 |
| 2. 先行研究 | 4.1. 「お・ご～になられる」の使用の推移 |
| 2.1. 文化庁による調査結果 | 4.2. 「お・ご～になられる」の上接語の調査 |
| 2.2. 「お・ご～になられる」に関する先行研究 | 4.2.1. 「お・ご～になられる」と用いられる上接語の間の乖離 |
| 3. 研究方法 | 4.2.2. 「お・ご～になる」の過剰使用と見られる「お・ご～になられる」 |
| 3.1. 研究対象 | 4.2.3. 第三者を意識したものと見られる「お・ご～になられる」 |
| 3.2. 調査方法 | 5. おわりに |
| 3.2.1. 調査対象期間 | |
| 3.2.2. 検索語の選定 | |

キーワード：なられる(Narareru), なる(Naru), 国会会議録(The minutes of Congress), 二重敬語(Double honorific), 尊敬語(Respect expression)

1. はじめに

現代日本語における「尊敬語」は、『敬語の指針』(2007)によると、「特定形」「お・ご～になる」「お・ご～なさる」「お・ご～だ」「られる」などの形で表すことができるが、本稿では、様々な尊敬語のバリエーションの中で「お・ご～になる」を取り上げ、これを中心に考察したものについて述べる。

- (1)a. 先生はお帰りになりました。
- b. 先生はお帰りになりました。

* 嶺南大学校、非常勤講師、日本語学

上記の(1)を見ると、「帰る」という動詞に、aは「お～になる」が、bは「お～になられる」が用いられているが、文法的にaが正用でありbは誤用である。このような正誤判断は通説として確立されているものである。また、「お・ご～になられる」は、「お・ご～になる」に対照されるものとして「お・ご～になる」から逸脱したものと解釈されることが多いが、これは、いわゆる「二重敬語」である判断からであると思われる。「二重敬語」というのは、一つの語に同じ種類の敬語を二重に使用したものを意味するが、「お・ご～になられる」は、「お・ご～になる」に、さらに尊敬の意を表す「られる」が重なったため、この表現を「二重敬語」として判断することができる。

(2)お盆休みは、どのようにお過ごしになりましたでしょうか？

(<https://koberope.jp/en/roppy/news/post-1615>：ヤフーブログ)

(3)市から送付しました「後期高齢者医療仮徴収額決定通知書」につきまして、封筒の
あて先欄の印刷が配慮に欠けた部分があり、お受け取りになられた皆様に不快な思い
をお掛けしましたことに、深くお詫び申し上げます。

(<https://www.city.kisarazu.lg.jp/saigai/index.html>：広報きさらづ)

(4)えーもう一つあるんですがまず最初の方ですけれどもえー二種類使いましたえーこちらの
テキストはえー杉藤先生が千九百八十五年の研究で英語の朗読材料としてお使い
になられた文の一部になっています。

(CSJ¹⁾：独話・学会、女性、1970-1974)

しかし、(2)~(4)の「お過ごしになられる」「お受け取りになられる」「お使いになられる」のように、個人ブログや広報、実際の話し言葉など、様々なジャンルにおいて「お・ご～になられる」の使用例が多数観察される。そこで、本研究では、「誤用」とされる「お・ご～になられる」に焦点を当て、実際の話し言葉におけるこの表現の使用実態を探ってみたい。

2. 先行研究

2.1. 文化庁による調査結果

平成7年度(1995年)と平成10年度(1998年)の文化庁の「国語に関する世論調査」で

1) 日本語話し言葉コーパスの略字。

は、二重敬語にかかわる質問項目があり、それについて簡単に紹介する。まず、平成7年度の調査では、「お客様はお帰りになられました」に「気になる」と答えた人は23.6%、「先生がおっしゃられたように」という文に「気になる」と答えた人は24.5%であった。このような結果から二重敬語に抵抗を感じる人が少ないことが読み取れる。また、平成10年度の調査では「鈴木さんはおいでになられますか」に対し「気になる」が26.2%、「気にならない」が69.9%であり、依然として「お・ご～になられる」について違和感を感じる人が少ないことが目立つ結果である。

以上の2回の調査から「お・ご～になられる」は、現在の日本社会で自然な敬語表現の一つとして位置付けをしている段階であるという解釈ができればよい。

2.2. 「お・ご～になられる」に関する先行研究

菊地(1994:406-437.)は、「お読みになられる」「おっしゃられる」などの例を挙げながら、「お・ご～になられる」を二重敬語として定義し、語形の誤りによる誤用であるとしている。また、このような二重敬語は聞き手に過剰な印象を与えるので、不適切な敬語使用であると指摘している。また、「お・ご～になられる」は「お・ご～になる」に「られる」を加えることで、表現の敬度がより高まるという話し手の意識から生産されたものであるとし、敬語をあまり使い慣れていない人がつい使ってしまう感じの不自然な敬語であるとしている。

井上(1999:62-81.)は、「お・ご～になられる」は「敬意低減の法則」²⁾により産出されたものとし、この表現が近年増加した理由は、一度このような言い方を使い始めるとそうでない言い方は敬意度が低く感じられるため、さらに「られる」を加えるようになったと述べている。また、「お・ご～になられる」のような二重敬語は都市部の「商工サービス業・自由業」を職業とする人が「お客様＝神様」という意識の基で、「商業敬語」として使いはじめたとしている。

滝浦他(2016:128-144.)は、最近いくつかの敬語を重ねて使用することは、社会全般において敬意低減が進行している傾向があるため、「～になる」の部分が敬語としての意味を失いつつあると指摘している。

新田町(2018:59-89.)は、現在使用される「お・ご～になられる」を「ら抜き言葉」と関連付けて説明している。「出れる→出られる」「見れる→見られる」のように、語形修正をするのが本来の語構成の在り方なら、それと連動するような語形の在り方として「なる」

2) 「敬意低減の法則」とは、言葉の丁寧さの度合いが、使われているうちに以前より下がり、乱暴に感じられる傾向をいう(井上1999:62.)。

または、その可能形である「なれる」が「なられる」になったとしている。また、学校教育における「ら抜き」修正の文法指導が、丁寧さを添えようとしてはからずも生まれてしまった過剰な「なられる」を広めるのに影響を与えたと述べている。

上述のように、「お・ご～になる」に対比される「お・ご～になられる」は、敬語全般において進行中である敬意低減の影響を受けたものとして、本来の形である「お・ご～になる」より敬意度の高い何かを補おうとした心理の働きから生まれた表現であることがこれまでの先行研究により明らかになっている。

しかし、この表現が実際にどのような頻度で用いられているのか、また、この表現と共起する各語の使用の数値に着目して、時間的変化による「お・ご～になられる」の使用実態を分析したものは管見の限りまだ存在しない。

したがって、本稿では、口語資料である『国会会議録検索システム』を対象に、「お・ご～になられる」の使用推移の変動を観察した上で、なぜこのような表現が使われるようになったのかについて共起する語の分析を通して明らかにしたい。

3. 研究方法

3.1. 研究対象

本研究では、web上で公開されている『国会会議録検索システム』³⁾ (以下、『国会会議録』とする) を用いて、尊敬表現として使用された「お・ご～になられる」の使用実態を調査する。研究の主な資料として『国会会議録』を選定した理由は、これを利用して研究を行った李(2019)と同様であるが、まず、国会会議は改まった場であるため、敬語の使用が非常に多く観察されるという利点がある。また、『国会会議録』は、長期間にわたり記録をしているデータであるため、言語の経年変化を探る上で優れた資料と判断される。このようなことから、『国会会議録』⁴⁾の衆議院の予算委員会⁵⁾を本研究の調査対象として選ぶこととした。

3) <http://kokkai.ndl.go.jp/>

4) 井上(1999:139.)によると、敬語の使い方は学歴と関連が深いとし、特に高学歴の老年層が覚えないと使えない難しい敬語を使いこなしているとしている。このようなことから、『国会会議録』の話し手である国会議員の多数が高学歴で老年層の人が多くを考えると、国会議員の使う「お・ご～になられる」の使用の変化を探ることは意味のあるものとして判断されたため、本稿の研究資料として『国会会議録』を選んだのもある。

5) 本会議やある委員会は事前に原稿や朗読要旨などが用意されているのに対し、予算委員会はあらか

3.2. 調査方法

3.2.1. 調査対象期間

『国会会議録』は、上述のように、長期間にわたる言語記録となるため、全てのデータを研究の調査対象とするのは困難である。そこで、本研究では、李(2019)と同様の方法を用いて調査を行う。調査方法は、国会会議が1947年に開会したので、1947年から年代を10年毎に区切り、サンプル調査をする。調査期間は以下のとおりである。

- ・ 1947年5月1日～1948年4月30日(以下、1940年代と称する)
- ・ 1957年5月1日～1958年4月30日(以下、1950年代と称する)
- ・ 1967年5月1日～1968年4月30日(以下、1960年代と称する)
- ・ 1977年5月1日～1978年4月30日(以下、1970年代と称する)
- ・ 1987年5月1日～1988年4月30日(以下、1980年代と称する)
- ・ 1997年5月1日～1998年4月30日(以下、1990年代と称する)
- ・ 2007年5月1日～2008年4月30日(以下、2000年代と称する)
- ・ 2017年5月1日～2018年4月30日(以下、2010年代と称する)

3.2.2. 検索語の選定

調査の際に用いる最初の検索語は、「なられ」であり、そこから再度接頭語である「お・ご」がついたもののみを抽出する。また、以下の(5)のように、「になられる」の形が用いられていても、本動詞として使用されているものは全て除外しカウントした。

- (5)さて加藤君が大臣になられて、すぐ発表された意見の中には、こういうふうな法律は、…(後略)…。 (野坂参三・1948年03月18日)

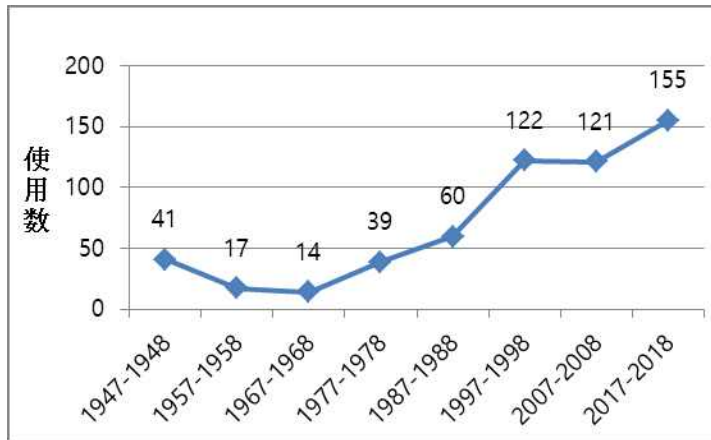
4. 調査結果

4.1. 「お・ご～になられる」の使用の推移

まず、尊敬表現としての「お・ご～になられる」がどれぐらいの頻度で使われているのか

じめ用意された原稿や要旨がなく、自由に会話が交わされる形式の会議である(李2019:118.)。したがって、予算委員会の国会会議録は、自然談話として認めることが可能であるため、本稿では予算委員会に限り調査を行うこととした。

を確認するため、上記の調査対象期間内の「お・ご～になられる」の使用数を調べたが、その結果を以下の〈図1〉に表す。



〈図1〉 各年代における「お・ご～になられる」の使用頻度

〈図1〉を見ると、「お・ご～になられる」の使用の変化の大きな流れとして、時間の経過とともにこの表現の使用が増加する傾向にあることがわかる。使用の変化を細かく見ると、1950年代と1960年代は1940年代に比べ、その使用が半分以下に減少していることが確認できる。だが、1970年代から「お・ご～になられる」の使用が徐々に増加しはじめ、1990年代を境にこれの使用が2倍以上の数値で増えるようになる。また、この表現は2000年代以降にその勢力を拡大する様相を呈している。

しかし、李(2019)の指摘のとおり、『国会会議録』の発言数(延べ語数)のみを年代別に比較することは、調査対象となる表現の使用の変化という全体像を把握するには容易であるが、正確な使用変化を探るには適切な方法ではない。何故ならば、発言数のみ調査することは、母数の異なるものをそのまま比較することとなるためである。

したがって、使用の推移を観察するのに用いる数値に客観性を持たせるため、李(2019)を参考に各年代別に行われた議会会期を調べ、各会期の会議号数を数えた上で、会議1号につき発言される「お・ご～になられる」の回数を調査した。その算出式は次のようであり、算出した結果を〈表1〉にまとめて示す。

*会議1号当発言される「お・ご~になられる」の回数 = 発言数(延べ語数) ÷ 会議号数

<表1> 各年代における「お・ご~になられる」の会議号数と発言数

	発言数 (延べ語数)	会議号数	会議1号当 表れる 「お・ご~に なられる」 の回数
1940年代	41	49	0.8
1950年代	17	23	0.7
1960年代	14	27	0.5
1970年代	39	35	1.1
1980年代	58	34	1.7
1990年代	115	47	2.4
2000年代	117	23	5
2010年代	155	31	5

<表1>を見ると、会議1号につき発言される「お・ご~になられる」の平均値が、1940年代は0.8、1950年代は0.7、1960年代は0.5であり、1940年代から1960年代までは会議1号につき発言される「お・ご~になられる」の回数が1回に満たないことがわかる。しかし、1970年代からは、会議1号当たり表れる発言の平均値が1回を超えるものとなり、1990年代になると平均発言数が2.6として、1970年代に比べると2倍以上の数値でこの表現が使われるようになったことが確認できる。

一方、<図1>では、1980年代から1990年代の間に「お・ご~になられる」の使用に大きな変化が見られたが、会議号数に基づき算出した<表1>に拠ると、1990年代から2000年代の間にこの表現の発言が2倍以上増加したことがわかる。このことから、「お・ご~になられる」の使用が急激に増えた時期は、1990年代と2000年代との境であるということが出来る。また、2000年代に入ってから、会議1号につき5回という値で「お・ご~になられる」が継続して頻用されることが<表1>から読み取れる。

以上のように、『国会会議録』における「お・ご~になられる」の使用は、1970年代から徐々に増えはじめ、2000年代を超えると用いられる頻度はより高くなる。

このようなことから、「お・ご～になられる」は文法的には誤用であるが、実際の運用においてはよく用いられる傾向を見せているため、単なる誤用とすることはできない⁶⁾。なお、「お・ご～になられる」をもちや日本社会で親密度⁷⁾の高い尊敬表現の一つとして捉えざるを得ないだろう。

4.2. 「お・ご～になられる」の上接語の調査

前節では、時間の経過とともに「お・ご～になられる」の使用が増加してきたことを確認したが、この節では、「お・ご～になられる」における使用の増加の原因となるものを探るため、「お・ご～になられる」の「～」に該当する動詞の語幹部、つまり上接語を調査した。まず、用いられた上接語の異なり語数を〈表2〉に示す。

〈表2〉上接語の異なり語数

	1940年代	1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代	2010年代
異なり語数	23	12	9	23	29	48	39	36

上述のとおり、1940年代から2010年代まで「お・ご～になられる」の使用は増加する傾向にあるのに対し、上接語の異なり語数は〈表2〉からもわかるようにほぼ横ばいで推移している。つまり、「お・ご～になられる」の使用頻度が年々高くなっても、用いられる上接語の数においてはそれほど変化が見られないということである。そこで、「お・ご～になられる」と主に用いられる上接語の性質を把握するために使用頻度の高い上接語を調べたが、それを次の〈表3〉に使用数の多い順に1位から10位まで示す(ただし、上の〈表3〉には1回のみ使用されたものは除外し示した)。

6) 本稿は「お・ご～にあなられる」が誤用か正用かを判別するものではなく、実際の会話におけるこの表現の使用実態を調べるためのものであるため、正誤判断に関する問題は今後の研究課題とする。

7) 陳(2016:16.)は、「親密度(familiarity)」について、言語話者がある表現を見たり、聞いたりする頻度、またはその人がある表現をどの程度知っているかを表す概念であるとしているが、本研究でも「親密度」という用語をそのような意味合いをもつものとして用いる。

<表3> 各年代別の使用頻度の高い語

	1940年代		1950年代		1960年代		1970年代		1980年代		1990年代		2000年代		2010年代	
	上接語	数	上接語	数	上接語	数	上接語	数	上接語	数	上接語	数	上接語	数	上接語	数
1位	考える	11	考える	4	認める	4	考える	5	考える	10	答える	14	指摘する	31	なくなる	27
2位	提案する	5	述べる・答える	2	なくなる・考える	2	答弁する	4	答える	7	考える	11	答える・認める	7	考える	20
3位	出す	4					述べる・認める・指摘する	3	指摘する	6	認める・指摘する	9	触れる・会う	5	答える	18
4位	決定する	2					示す・出す・話す	2	決める・示す	3	話す	7	なくなる・やめる・考える・話す	4	認める	15
5位							述べる・認める・提起する・質問する・話す	2	渡す・会う	4	答弁する・聞く・思う・述べる	3	話す	10		
6位									帰る・作る・調べる・持つ	3	やる・感じる・帰る	2	指摘する	7		

								読む・ 使う・ 示す・ 作る・ 取り 組む			
7 位							やめ る・断 る・読 む・受 ける・ 示す・ 触れ る・出 す・就 く	2		感じ る・聞 く	6
8 位										述べ る	5
9 位										決め る	4
10 位										答弁 する・ 持つ	3

〈表2〉に拠ると、1940年代から2010年代まで上接語の数(異なり語数)はそれほど増えない。しかし、〈表3〉を見ると、1940年代から1970年代の使用頻度の高い語が「4位」であるのに対し、1980年代からは使用頻度の高い語の順位が「5位」になり、1990年代は「7位」、2000年代は「6位」、2010年代は「10位」となる。

換言すると、1940年代から1980年代まで使用数(延べ語数)の少なかった「お・ご～になられる」は、「考える・述べる・答える・認める」などの限られた語としか共起しない傾向を見せていたが、1990年代以降からは、「お・ご～になられる」の使用数(延べ語数)が急激に増加するにつれ、様々な語と共起し用いられるようになったということが言えよう。

以上のようなことから、1940年代から80年代まで1回しか使用されていなかったものが、1990年代以降からは「お・ご～になられる」の使用頻度が高くなるにつれ、1回のみ使

用にとどまらず、多頻度で使用されるようになり、それがそのまま定着しつつあるものとして考えられる。

それでは、年代が後になるにつれ、定着する傾向を見せる上接語について次節から詳しくみていく。

4.2.1. 「お・ご~になられる」と用いられる上接語の間の乖離

〈表3〉を見ると、1940年代から2010年代の間に「述べる」「話す」「答える」「答弁する」のように、聞き手の発言する行為と関連のある語が頻繁に用いられていることが確認できる。

(6) ただいまの御説明によりますと、特地あるいは超特地、甲地、乙地というような、地区的な関係をお述べになられるようでございますが、あらゆる物価は、水準物価を標準とされて今後お進みになるものだと思うのでございます。

(西村久之・1947年10月10日)

(7) いずれにしても、調査の結果としてはそういうものが出ているわけでありまして、それを総理はお述べになられました。

(加藤勝信・2018年02月09日)

(8) 今、北橋議員もお話しになられましたように、世界、特にアメリカから、かなりこの日本の政策転換を迫るようなシグナルが出ております。

(島聡・1998年01月06日)

(9) 一つは、今総理がお話しになられた、総理の奥様がかかわっていたのではないかと、総理の非常に親しい友人が理事長を務めているから、(中略)、一つは行政の私物化という問題があると思っています。

(逢坂誠二・2017年11月28日)

(10) 今いろいろお答えになられましたが、家賃の補助は六千円程度にするために五年間の補助があるということを言われましたが、実際に当選されて恒久住宅に入った方でも、本当に今事態は大変です。

(平賀高成・1998年03月19日)

(11) 日歯連からももらったものだとことをみずから、私も国民政治協会に返したと御答弁になられるのかなと予想していたのでちょっと驚いているんですけども。

(川内博史・2008年10月08日)

上記の(6)~(9)では、「述べる」「話す」がそれぞれ用いられており、これらの語に「お・ご~になられる」をつけて尊敬語として使用している。

〈表3〉でわかるように、「述べる」は1950年代に2位、1970年代3位、1980年代5位、2000年代5位、2010年代8位として、使用頻度の高い上接語として挙がってはいるも

の、その使用順位は徐々に落ちていくことが確認できる。これに対し、「話す」は使用頻度の高い語として〈表3〉に初めて挙げたのが1970年代4位であるが、それ以降も1980年代は5位、1990・2000年代4位、2010年代5位の語として、「述べる」より「話す」の使用が好まれているように思われる。

辞書の記述によると、「述べる」は「おおぜいの対象を意識して、話したり書いたりする」であり、「話す」は「声に出して、事柄や自分の考えを伝える」である。このように、「述べる」はその意味からおおぜいの人を意識して何かを言うことと解釈できるため、「話す」に比べて、より改まった言い方とすることができる。

しかしながら、尊敬語にするため用いる表現形式は、「お・ご～になる」ではなく「お・ご～になられる」である。これを言い換えると、尊敬表現となる形式は二重敬語まで使って丁寧さを最大限に高めようとしたこととは反対に、その内容となるものは、改まり度がやや低いものを選んだということである。

また、(10)(11)の「答える」「答弁する」の使用からも同様のことが窺える。1970年代までは「答える」と「答弁する」の使用においてそれほど差が見られなかったが、80年代以降からは「答える」の使用順位が高いことが〈表3〉からわかる。「答える」と「答弁する」の辞書の記述をまとめると、「相手の質問に対し説明したり、回答したりすること」として両者のもつ意味が似ているが、改まり度は、和語動詞である「答える」より漢語サ変動詞である「答弁する」のほうが高いと言える⁸⁾。しかし、これらの語の使用においても、用いる形式は「お・ご～になられる」であるのに対し、上接語となるものは改まり度の低い「答える」である。

したがって、「お・ご～になられる」とよく共起する語の全体的な傾向としていえるのは、話し言葉に近い性質をもつものがよく選ばれるということである。また、これは、最近の日本語の敬語の使用において、表現する文の丁寧度を高めるために、上接する動詞の丁寧度に気を配るというよりは、文末の表現形式に何かを付け加えて丁寧さを表そうとする傾向が強まっていることと窺える。

(12)ただいま御質問になりました点は係争中の裁判の内容にかかわることでございますので、若干お答えしにくいわけでございますけれども、一般論としてお答えさせていただきますと思います。
(齊藤邦彦・1987年07月13日)

(13)外交交渉を積極的に推し進めるのであれば、外務大臣がもちろん中心になってやるん

8) 菊地(1994:38.)は、「今日」に対する「本日」、「さっき」に対する「先程」という例をあげながら、和語よりも漢語のほうが改まった趣が出る傾向があるとした。

ですが、その状況がどうであるかという情報はお聞きになられているんですか。

(後藤祐一・2018年02月07日)

李(2017)の『国会会議録』を用いて行った「いたす」と「させていただく」という謙讓表現の調査では、国会会議という場面の特性上、「質疑」と「応答」に関連のある語の使用が1940年代から2000年代になるまで継続的に観察されるとした。だが、本調査ではそれとは若干異なる傾向を示している。〈表3〉を見ると、発言する行為と関連のある語の使用は比較的早い時期から見られたのに対し、「尋ねる」という意の語である(12)の「質問する」は1980年代から、(13)の「聞く」は1990年代以降から上位の上接語として現れる。

このようなことから、国会会議での尊敬表現として用いられる「お・ご~になられる」の使用においては、「質疑」より「応答」に関する表現が優勢であると解釈される。なお、「質疑」と関連のある語の使用においても、「お・ご~になられる」が急増する1990年代以降になると、漢語動詞である「質問する」と和語動詞である「聞く」が交替される様相を呈する。

4.2.2. 「お・ご~になる」の過剰使用と見られる「お・ご~になられる」

〈表3〉に拠ると、1940年代から2010年代まで「考える」「認める」が継続的に上位の上接語として使用されており、2000年代以降になると「感じる」も加えて、上位の上接語として使用されることが確認できる。

(14)当初六・七とおっしゃったのは、また五・三というように改定になってきた。いろいろな答弁の中では総理はよく、確信を持っておっしゃっているわけですが、非常にこれが外れるのですね。(中略)そういう点についてはお考えになられるわけですか、もしもいかなる場合は。いかがですか。(近江巳記夫・1978年1月28日)

(15)道路のことについて聞かせていただくわけでございますけれども、まずその前に、総理、総理大臣としてではなく個人として、今十万円お小遣いがあるとすれば、総理は何に使おうかなというふうにお考えになられますか、(後略)

(川内博史・2008年2月12日)

(16)教員の地位に関する勧告が一九六六年十月五日に出されまして、その中で、「昇格は、教員団体との協議により定められた厳密に専門的な」云々という文章がありま

す。とのことに関して、この六六年十月五日に採択されたということについてはお認めになられますか、大臣は。 (中西績介・1977年3月1日)

(17)全国十一カ所で納税者一揆が起こっている、そのこと自体の責任を財務大臣としてお感じになられませんか。 (柚木道義・2018年2月19日)

(14)(15)の「考える」は、上述のように1940年代から2010年代まで〈表3〉において使用頻度の高い語1位ないし、2位として用いられている語である。この語の意味を辞書から調べると、「知識や経験などに基づいて、筋道を立てて頭を働かせる。判断する。結論を導き出す。」となっている。この記述から「お考えになられる」という表現は、ある論点について聞き手の知識や経験に基づいて判断すること、または、結論として出せる聞き手の意見のことを意味すると思われる。したがって、(14)(15)の話し手は聞き手の意見を要求する場面において、「考えますか」または、「お考えですか」という意味の表現を「お考えになる」という尊敬語だけでは聞き手を攻撃⁹⁾しているような印象を与えられる恐れがあると判断した結果として表れたものと推察される。

(16)の「認める」も「考える」と同様に、全年代にわたり使用頻度の高い上接語の上位に分布している語である。辞書上の意味記述には、「見て、また考えて確かにそうだと判断する。」とされている。この記述を引用すると、聞き手に「確かにそうだと判断するのかわ」と答えを要求する場面で尊敬表現を用いるならば、「お認めになる」とするのが正用である。だが、話し手は「お認めになる」のみでは攻撃性が和らげないという意識が働くようになり、その結果として出されたものが誤用ではあるが、「お認めになられる」ではないかと思われる。

(17)の「感じる」は、1940年代から1970年代まではその使用が1例も見られなかったが、1980年代になると初めて1例が観察され、1990年代も1例見られる。しかし、2000年代以降になると、2000年代2例、2010年代6例として、使用頻度の高い上接語として〈表3〉にあがるようになる。(17)は、聞き手にある事態に関して説明し、それについてどのように感じるのかわ答えを要求する場面として解釈できる。このような場面において、話し手は「お感じになる」でなく「お感じになられる」という表現を用いている。したがって、これもまた

9) 李(2016:252.)は「させていただく」の使用実態を調べるためにアンケート調査を行ったが、その調査で「言わせていただく」に「攻撃性を感じるか」という質問に対し、100人のうち64人が「そうだ」と答えた。このような結果から日本語の敬語には、ことばそのものは聞き手を攻撃するような意味をもたなくても、用いる場面によっては聞き手に攻撃性を感じさせることも十分あり得るといえる。したがって、本稿も李(2016)の主張に賛同する立場として「お〜になられる」も使用する場面によっては聞き手に攻撃性を感じさせる恐れがあるものと判断した。

(14)～(16)の使い方と同様に、本来述べようとした内容をやや和らげて表現するために使用したものと考えられる。また、2000年代以降からその使用が徐々に増えている状況であるので、この語の推移については今後も持続的に観察する必要があると思われる。

以上、(14)～(17)の「考える」「認める」「感じる」は、聞き手に話し手が強い姿勢で何かを要求するような内容を述べるのに、「お・ご～になられる」を使うことによって、聞き手を攻撃するような印象を薄めようとしたことと解釈される。だが、このような使い方は「慇懃無礼な表現」と感じさせる恐れが高いとも言える。即ち、このような表現は、その場にふさわしい敬語の形式を選ぶことに当たり、「強制力を感じさせない表現のほうが、強制力を感じさせる表現よりも、相手を立てる（丁寧な）表現となる」¹⁰⁾という敬語に対する意識が変質されて表れたものとして推察される。

4.2.3. 第三者を意識したものと見られる「お・ご～になられる」

〈表3〉を見ると、「なくなる」が1960年代には使用頻度の高い上接語としてあったが、1970年代から1990年代までは〈表3〉から確認ができなくなる。しかし、2000年代以降になると「なくなる」がまた上位の上接語として使われていることがわかる。また、実際の使用数も調べてみたが、1970年代の1例以外は、1940・1950・1980・1990年代は全て0例であった。したがって、「なくなる」は、2000年代以降に特にその使用が目立つ語であるということができる。

(18)それと、深刻なのは、この三十七ページの表にもありますように、投与後に千七百十一人の方が既におなくなりになっているんです、(中略)当然この調査もしないとだめだと思います。当然、おなくなりになられた方でも、感染しておられた、あるいは肝炎が原因でなくなられていたら、(中略)この方々の調査もするという事でよろしいですか。(山井和則・2008年2月18日)

(19)まず、質問に入らせていただく前に、北陸地方を中心とした豪雪被害でおなくなりになられた方々に心よりお悔やみを申し上げるとともに、被害に遭われた皆様に心よりお見舞いを申し上げさせていただきますと思います。(浮島智子・2018年2月20日)

「なくなる」の尊敬表現について、『日本国語大辞典』¹¹⁾に拠ると「人が死ぬことをや

10) 菊地(1994:84.)は、「～したほうがいいよ」が「～しろ」よりも、「～していただければありがたいのですが/幸いです」が「～していただきたい」よりもやわらかい表現と述べている。

や婉曲にいう語。尊敬表現や謙讓表現を用いるべき人に対しても、単に「なくなる」ということもできる。」としており、「なくなる」この語自体を尊敬表現として認定している。しかし、『敬語の指針』(2007:25.)では「お亡くなりになる」と「なくなられる」両形を尊敬表現として認めており、菊地(2010:61.)でも「なくなられる」「おなくなりになる」と言って初めて尊敬語になると述べている。このように、最近では「なくなられる」「おなくなりになる」を二重敬語ではなく、許容範囲に入る表現として認めているようである。

しかし、上記のように2000年代以降になると、見方によっては三重敬語ともいえる「おなくなりになられる」が国会会議の中から頻用されるが、この表現は明らかに誤用である。だが、これが頻用されるようになった理由については、この表現が使われた場面を見るとよくわかることである。(18)(19)の「おなくなりになられる」は、特に日本国民が災難や事故により被害を受けて死んだ人を対象に使われているが、これは、目の前にいる国会議員を対象に言ったことではなく、国会会議を視聴している国民を意識した発言として解釈される。即ち、話し手は、聞き手として第三者である国民を想定し、できる限り最大の表現を使用して哀悼の意を表しようとした結果、「おなくなりになられる」という誤用が表れるようになったと考えられる。

一方、(18)を見ると、破線部の「おなくなりになる」「なくなられる」と実線部の「おなくなりになられる」のように、「なくなる」という語に対して三つの形式が交互に使われていることがわかる。この例から、2010年代以降の「おなくなりになられる」という表現は、聞き手に表現できる最上級の尊敬表現として使われる場合も勿論あるが、「なくなる」を表現するために、「お～になる」「お～になられる」「られる」という尊敬表現形式を交互に3種類も使用したことから、これらの尊敬表現を同様の形式として捉えているという解釈ができる。換言すれば、2010年代以後に使用される「お～になられる」は、場合によっては、各々の尊敬表現が意味する改まり度とは関係なく、尊敬表現として表現できる様々なバリエーションの中の一つとしてこの表現を認識してことと考えられる。

5. おわりに

本稿では、『国会会議録』を資料として「お・ご～になられる」の使用の実態と経年調査を行った結果、以下のことがわかった。

11) 小学館第二版(2003)に拠るもの。

- ①1940年代から1970年代になるまでは使用数の変化は見られない。だが、1970年代以降になると使用数が徐々に増えはじめ、2000年代を超えると用いられる頻度は1970年代の倍以上の数値で使われるようになる。
- ②1940年代から2010年代まで「お・ご~になられる」の使用数は増加しているが、各年代に用いられた上接語数(異なり語数)の変化は見られなかった。しかし、各年代別に使用頻度の高い上接語を調べた結果、1940年代から80年代まで1回しか使用されていなかったものが、「お・ご~になられる」の使用が急激に増加する1990年代以降からは1回のみで使用であったものが多頻度で用いられるようになり、それがそのまま定着する様相を呈している。
- ③「お・ご~になられる」の使用頻度が高くなるにつれ、用いられる上接語は改まった意味をもつ語ではなく、話し言葉に近い性質のものがよく選ばれる傾向がある。
- ④李(2017)の謙譲語の調査では国会会議という場面の特性上、「質疑応答」に関連がある上接語の使用がよく見られるとしたが、「お・ご~になられる」の使用においては、「質疑」より「応答」に関連のある上接語の使用が優勢であった。
- ⑤話し手が聞き手に強い姿勢で何かを要求するような内容を述べる際に、「考える」「認める」「感じる」のような語と「お・ご~になられる」を組み合わせる使用によって、聞き手を攻撃しているような印象を薄めようとする傾向がよく見られた。
- ⑥「おなくなりになられる」は2000年代以降からその使用が目立つ表現であるが、これは目の前の議員ではなく、第三者である国民を意識した発言として考えられる。また、2010年代以降になると、この表現は多様な尊敬表現の中の一つとして扱われているように思われる。

【参考文献】

- 李讓珍(2016)「「させていただく」の拡大用法の使用実態について—日本語母語話者と外国人日本語学習者の比較を通して—」『日本文化研究』59、pp.241-264.
(DOI: <http://dx.doi.org/10.18075/jcs..59.201607.241>)
- _____ (2017)「「いたす」から「させていただく」への交替—『国会会議録検索システム』を資料として—」『日本言語文化』40、pp.91-110.
(DOI: <http://dx.doi.org/10.17314/jjlc.2017..40.005>)
- _____ (2019)「『国会会議録検索システム』に見られる「お/ご~させていただく」の使用について」『日本語学研究』第60輯、pp.115-134.
(DOI: <http://dx.doi.org/10.14817/jlak.2019.60.115>)

- 井上史雄(1999)『敬語はこわくない』講談社現代新書、pp.62-81.
菊地康人(1994)『敬語』講談社学術文庫、pp.29-440.
——— (2010)『敬語再入門』講談社学術文庫、pp.16-76.
北原保雄(2003)『日本国語大事典 第二版』小学館.
滝浦真人・大橋理枝(2016)「敬語のコミュニケーション」『日本語とコミュニケーション』放送大学教育振興会,NHK出版、pp.128-144.
陳雯(2016)「慣用句の透明度と親密度の関係について—日本語母語話者と学習者判断の比較から—」『筑波応用言語学研究』23、pp.15-30.
新田町義尚(2018)「ビジネス敬語における新しい判断基準について(4)—「なる」から「なられる」への二重敬語の派生と「-are-」接尾辞について(上)—」『大阪経大論集』69-1、pp.59-89. (DOI: https://doi.org/10.24644/keidaironshu.69.1_59)
文化審議会答申(2007)『敬語の指針』www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/.../keigo_tousi_n.pdf (最終検索日:2019年9月20日)
文化庁(1995)「国語に関する世論調査」http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeic_hosa/kokugo_yoronchosa/index.html (最終検索日:2019年9月25日)
———(1998)「国語に関する世論調査」http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeic_hosa/kokugo_yoronchosa/index.html (最終検索日:2019年9月25日)
山田忠雄・柴田武・酒井憲二(2012)『新明解国語辞典 小型版』三省堂.

논문 투고 일자 : 2019. 10. 12. 논문 심사 일자 : 2019. 11. 03. 게재 확정 일자 : 2019. 11. 06.
--

＜要旨＞

尊敬表現「お・ご~になられる」の使用について
 - 『国会会議録検索システム』を研究資料として -

李讓珍

本稿は『国会会議録』を資料として「お・ご~になられる」の使用について調査した結果、次のことがわかった。
 ①1940年代から1970年代になるまでは使用数の変化は見られないが、2000年代を超えると用いられる頻度は1970年代の倍以上の数値で使われるようになる。②各年代別に使用頻度の高い上接語を調べた結果、1940年代から80年代まで1回しか使用されていなかったものが、「お・ご~になられる」の使用が急激に増加する1990年代以降になると1回だけでなく多頻度で用いられるようになる。③「お・ご~になられる」の使用頻度が高くなるにつれ、用いられる上接語は改まった意味をもつ語ではなく、話し言葉に近い性質のものがよく選ばれる傾向がある。④李(2017)の謙讓語の調査では国会会議という場面の特性上「質疑応答」に関連がある上接語の使用がよく見られるとしたが、「お・ご~になられる」の使用では「応答」に関連のある上接語の使用が優勢であった。⑤話し手が聞き手に強い姿勢で何かを要求するような内容を述べる際に、聞き手を攻撃しているような印象を薄めるためにこの表現を用いる傾向がよく見られた。⑥「おなくなりになられる」は2000年代以降からその使用が目立つ表現であるが、第三者である国民を意識した発言として考えられる。

The use of the honorific expression "*O/Go~ninarareru*"
 -In "Diet Conference Proceedings"-

Lee, Hyeon-Jin

This study examined the use of "*O/Go~ninarareru*" in "Diet Conference Proceedings" and found the following: 1) There was no change in its frequency of use between the 1940s and the 1970s, but since the 2000s, it has been used more than twice as frequently as in the 1970s. 2) According to a survey of frequently used words by age, those used rarely between the 1940s and the 1980s were used more frequently in the 1990s when the use of "*O/Go~ninarareru*" rapidly increased. 3) As the frequency of use of "*O/Go~ninarareru*" increases, the words used tend to be chosen not to be polite but rather to be similar to spoken words. 4) "*O/Go~ninarareru*" is predominantly not "question" but "response" related words. 5) This expression tends to reduce the impression that the speaker is attacking the listener when making a strong demand for something. 6) "*Onakunarininarareru*" is a phrase that has been used frequently since the 2000s and is interpreted as a statement made in consideration of other people, the third listener.